

文学研究論集第43号¹⁵

論文受付日 二〇一五年四月二十四日

大学院研究論集委員会承認日 二〇一五年五月二十五日

芥川龍之介「首が落ちた話」論

——日清戦争と語りの戦略——

Sino-Japanese War and the Narrative:
Akutagawa Ryunosuke's

“The Story of a Head That Fell Off”

博士後期課程一年 日本文学専攻 二〇一五年度入学

金子佳高

KANEKO Yoshitaka

【論文要旨】

芥川龍之介は、近代中国を舞台として中国人主人公を物語るに際して、どのような語りの手法を採用したのか。近代中国を舞台とした芥川の最初の小説であり、日清戦争を舞台とする「首が落ちた話」を具体的に検討することで、この問題を考えたい。この小説には、さまざまな語りを並列する複眼の構図を取り入れることで、中国を一元的には語り得ない叙述の困難さを回避しているように思われる。とりわけ、日清戦争

という後景を取り込むことで、多様な語りによる主人公の叙述が、権威的な語りの相対化につながっていると思われる。本稿では、日清戦争の頃に兆した中国を抑圧的に差異化するエクリチュールを、三つの種類の語りが相対化するありようを闡明するものである。一つ目は、中国と日本を同一に見做すコスモポリタニズム的な語り。二つ目は、国家に忠実な英雄を創出しようとするメディアに特有な語り。三つ目は、農商務省技師の理系人物の語り。これらの語りが軋み合うありようをみることで、芥川が中国をどのように物語ったのかを考察したい。

【キーワード】 芥川龍之介、首が落ちた話、中国、日清戦争、コスモポリタニズム

一

芥川龍之介の「首が落ちた話」(新潮一九一八年一月)は、日清戦争の際日本軍と清軍が戦闘を行う遼東半島を舞台とし、清の騎兵である何小二を主人公とする。日清戦争を題材とした小説には、泉鏡花の「海城発電」(太陽一九一六年一月)や川上眉山の『大村少尉』(春陽堂、一八九六年五月)などがあるが、前者は日本赤十字社の看護員、後者は日本兵を主人公としており、いずれも日本人が主人公となっている。日本兵を主人公とせず、日本にとって敵国である清の兵士を焦点化し、その内面を描いているのが、「首が落ちた話」の文学史的意義と言える。⁽¹⁾

日本人の読者を対象とした小説が中国人を主人公としてその心中を開

示する際、そこには語りの面で不可欠な手続きがあるようにおもわれる。それは、中国人に対して敵愾心を抱いたり、中国を野蛮な国と見做して蔑視したりするパラダイムを内包させたまま主人公を語ることなく、中国人と日本人を同じ人間と見なす同胞意識の視座から物語ることである。同朋意識の語りの装置がなく、中国人に対する敵対・賤易の視座から語りを行えば、読者は語り手の主人公に対する批判的なまなざしを受け継いだまま物語を読むことになるため、読者はあくまで日本人の視点から主人公を批判的に眺めるにとどまってしまう、中国人の主人公への感情移入が妨げられるのだ。コスモポリタニズムの語りの装置があつてはじめて、日本人読者は中国人主人公に己を重ね合わせて同化しうる。

中国に対する賤視の捨象が欠かせないだけでなく、中国人の視座から敵対的に日本を眺めるという語りも回避されなければならないだろう。日清戦争を描いた鏡花の「海城発電」は、博愛主義の看護員・神埼が愛国主義の軍夫・海野と対立する様相を描いた小説だが、この小説が、「作家が其主人公（看護員）の性格を日本人に造らずして却て支那人の如く作りたるは最も大なる失策と云ふべし。苟も日本として日本人に特有なる国家的観念を欠かしめは、その代わりに、如何なる美德を帯はしむるとも読者何によつて其人物に同情を寄するを得ん。」⁽²⁾という同時代評を招来したことを思い起こしてよい。主人公が日本の愛国主義を批判的に眺めるだけで、つまり、中国的視点から日本的視点を批判するだけで、日本人読者は主人公に感情移入できなくなるのだ。中国的視線から日本を区別し、敵対化した視点で叙述を行えば、読者には強い反発心が醸成されるため主人公に感情移入しにくくなるのである。⁽³⁾

日本人に向けて中国人主人公を物語る際には、日本的視点から中国を侮ることも、中国的視点から日本に批判的であることも、回避されなければならない。日本と中国を区別し、そのいずれかを上位化し中心化するという語りの構造を避け、両者を同等のものとして見做す語りの手続きが必要となってくる、と言い換えることもできる。

実際、「首が落ちた話」の語りの特質は、中国と日本とを隔てる差異化のまなざしが排除され、中国と日本を同等に見做すというまなざしにある。何小二の属する清の騎兵と日本の騎兵との間で突然白兵戦が開始された際、日本騎兵の方へ押し寄せる中国騎兵の様子は、「いづれも犬のやうに歯をむき出しながら、猛然として日本騎兵のある方へ殺到した」（傍線は引用者、以下同）と描かれている。日本騎兵の描写に関して、「すると敵も、彼等（中国騎兵のこと―引用者注）と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後には、やはり歯をむき出した、彼等の顔を鏡に映したやうな顔が、幾つも彼等の左右に出没し始めた」とされてゐる。中国騎兵・日本騎兵のいずれも「歯をむき出し」にしているのであり、日本騎兵の顔は中国騎兵の「顔を鏡に映した」ようなのである。日本騎兵の内面も、中国騎兵の感じる衝動と「同じ衝動に支配」されている。突然敵国の兵隊に遭遇して動物的対抗心を燃やす日本騎兵と中国騎兵の表情や衝動の同一性を強調する語りの力学を析出できる。突然の敵兵との遭遇にも理性的な対応をする日本騎兵に反して動物的衝動に支配される中国兵を対照させたり、逆に中国兵の冷静さに反して日本兵の取り乱した様子を対照させたりすることもなく、いずれの国の兵士の表情・衝動も同じものとしてデザインしているのである。

また、日本騎兵と戦う際の「何小二は自分にもまるで意味を成さない事を、気違ひのやうな大声で喚」くのであるが、そこへ突然躍り出た日本騎兵も「眼球がとび出しさうに眼を見開」き、「血相の変つてゐる」顔をしている。日本騎兵・中国騎兵いずれも、心の準備のないままの突然すぎる敵兵との戦いに必死になり、心の平静さを失っている様子が強調されていると言える。ここでも、日本・中国いずれかを上位に位置づけることなく、人間として同じ心理を持っているかのように語られているのだ。

日清戦争に報知新聞の特派員として従軍した遅塚麗水の見聞録『陣中日記』（春陽堂、一八九四年二月）において、平壤攻防戦に向かう途中の戦闘を描いている部分で、「清兵は所謂武士道なるものを知らず」というように、武士道の有無によって日本と中国を差異化し、それによって両者の優劣を鮮明にしている記述があることを背景にしたとき、「首が落ちた話」におけるこうした語りの意義が見えてくるだろう。日本騎兵と中国騎兵の同一性をことさらに強調していることは看過されるべきではない。

首を切られた何小二を乗せた馬が高梁畑の中を無二無三に駆けて行く際に突如挿入される、「日の光も秋は、遼東と日本と変りがない」という記述にも、芥川の語りへの慎重な目配りが発揮されている。日の光に関して日本と中国で違いがないかのように表現することで、日の光の持つ象徴性（おそらくは寂しさという意味合い）が日本と中国で同一であることを示している。自然物の持つ記号性が、日本・中国の両国において同一であることをわざわざ強調しているのである。

それに加え、この記述により、「日の光」の強度が日本と中国で同じであるかのような印象を与え、日本と中国であたかも気候に差異がないかのように示す効果もある。実際、この小説では中国と日本の気候的差異を表現することは一切なされておらず、日中の気候的差異を捨象するというテクストの空白は重大な意義を持つようにおもわれる。水本浩典・細淵清貴の共同研究によると、「従軍日記の記述を確認すること」で、「兵士にとって日清戦争は、清国兵との戦闘以上に寒さや病気との闘いであったことがわかる」という。⁽⁴⁾たとえば、澤茂三吉は『征清日誌』（三省堂、一九三二年）の中の「十二 旅順より金州へ移動」の中で、「十一月二十七日、前夜の期待は外れて雪は雨まじりとなり風止まず」としたうえで「雨は已に衣に湿潤して寒氣激しく暖をとりて又行く。雪は氷となり顔を打ち痛し」と記し、遼東半島の十一月の寒さを訴えている。日本では経験できない寒さに対する苦衷を打ち明ける兵士たちの言説を背景に置くとき、「首が落ちた話」が遼東の寒さを描写しないうえ、遼東と日本の気候が同じであるかのようなニュアンスを含んだ表現を持つことは、注目されてよい。日本と中国を差異化する力学をあえて排除しているのだ。

語り手が中国の軍隊を日本の軍隊と同じような近代的な組織として見做していることもまた、重要である。語り手が中国の軍隊を前近代的な野蛮な組織として賤視すれば、中国を日本との同朋意識で把握するという語りの装置を作り出すことができなくなってくるからである。

何小二の属する中国騎兵が日本騎兵に突然遭遇し、戦闘が開始された際、「それから後の事は、どうも時間の觀念が明瞭でない」と記され、

「その騒ぎがどの位つづいたか、その間にどんな事件がどんな順序で起ったか、かう云う点になると、殆何一つはつきりしない」とされるのは、何小二が時間の観念を失ったことを示すためだろう。そして、日本騎兵に首を切られ、馬に乗って高梁畑を突き進むとき、「人の身の丈よりも高い高梁は、無二無三に駆けてゆく馬に踏みしだかれて、波のやうに起伏する」とされ、何小二が自然の時間感覚、つまり、円周上を始めなく終りなく循環し、時間の長さや順序を問題にしない時間感覚に回帰しつつあることを暗示していることから、何小二が失った時間認識とは、時間の長さや順序を重要視する、両端の閉じた有限の直線として表現される近代的な時間観念であるだろう。そのような近代的な時間観念を何小二が喪失したことを強調することで、逆に何小二が近代的な時間観念を把持していたことを示すことにもなるのだ。

成沢光は、明治政府によってフランスとプロイセンをモデルとして近代化された軍隊の規律の特徴の一つに「時間割による行動規則」⁽⁵⁾があるとする。吉田裕も、「軍隊は、工場・学校とならんで、人間を近代的時間秩序の中に馴致してゆく重要な場となっていたのである」と述べ、「日本軍の場合、すでに一九〇〇（明治三三）年の北清事変の段階で、下士官クラスまで腕時計を所持していたといわれている」としている⁽⁶⁾のだが、日本において軍隊は、近代的時間観念の中に人々を囲い込む場として機能していたようだ。

したがって、「首が落ちた話」において、語り手が何小二の近代的時間秩序の喪失を描き出したことは重要な意義を持つてくるだろう。語り手は、何小二が近代的時間秩序を失ったことを描くことで、逆にそうし

た時間観念を持っていたことを暗に物語っているであり、中国の軍隊が近代的な時間観念を教育する場であると捉えているのである。語り手は、中国の軍隊を賤視することはせず、日本の軍隊と同じように、近代性を備えた組織として叙述しているのだ。

「首が落ちた話」の語り手は、中国と日本を同等に見做す視座で語りを行うことで、読者が主人公に速やかに感情移入できる装置を作り出しているのだが、このような語りの特徴は、物語のモチーフを語りの位相に投影したものである。首を切られ、死の恐怖に苛まれる何小二は、戦争に関係するあらゆるものに恨めしさを感じる。しかし、馬の上から転げ落ちた何小二は、自分の横を通り過ぎて行った日本騎兵の一隊に対して、「ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と変わらないのであらう。もし彼等が幻でなかったなら、自分は彼等と互に慰め合つて、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい」という感慨にふけり、誰をでも許したいと感じるようになる。個々の分節化した状態に醜さを感じ、世界との融和を志向するというこの小説のプロット⁽⁷⁾は、戦争という暴力的な営為に動員される悲劇は、日本兵であらうと中国兵であらうと同じはずだという、作者の人道主義的な考えを反映するものであらうが、世界との融和というモチーフを支えるためにも、中国と日本を同等に見做す語りの手続きは必要になってくるのである。

関口安義は「語り手の語り口には、清国兵を軽視した物言いはまったくない」⁽⁸⁾とし、林剣君は語り手が「何小二と同化するようにして」⁽⁹⁾語っているとするが、以上のように、語り手の語りの特質は、日本と中国を同一に見做し、両者の差異を無化する点にあるといえる。空間上の制限

を超えて、人間というものの本質に迫ろうとする志向性は、松浦一が『文学の本質』（大日本図書、一九一五年四月）において、国と国との境界を超えて文学の本質を見定めようとした態度と共時性を持つ。芥川も受講した東京帝大での講義に基づいたこの本は、芥川が「松浦一氏の『文学の本質』に就いて」（『読売新聞』一九二六年一月二日）で書評をしたものである。この本の中で松浦は、「文学というものに纏いつている因襲、人間の利害、もしくは各国の文学にそれぞれ特質なる国民性というようなものはみなひき剥いでしまつて、赤裸々なる『文学』という一体が、赤裸々なる我々の心眼に映じたるものそのままを現してみたいと思う」とし、「文学の実体は、それで人間そのものの実体と等しく、時間・空間の制限、国民性の事情などを超越しているもの」であるとする⁽¹⁰⁾。芥川が近代中国を舞台として中国人を描く際、『文学の本質』に見られるようなコスモポリタニズムの戦略を採用していたことは注目されてよい。

本稿では、中国を日本と同等に見做す語り手のコスモポリタニズム的な語りのことを、〈立場をもたない語り〉と呼ぶことにする。

二

それに対して、この小説の「下」で木村陸軍少佐が語る何小二の物語は、中国と日本を二項対立の二つの極に對置させ、日清戦争の頃から瀾漫し始めた中国に対する貶視を識國下にひそませたものであり、中国と日本を同等に見做す語り手の〈立場をもたない語り〉とは対立する構図が見られる。

「下」は下関条約から約一年後の早春に、北京の日本公使館の一室で、公使館附武官の木村陸軍少佐と農商務省技師の山川理学士とが雑談に耽る様子を描く。二人の話が日清戦争当時の追憶に及んだ際、木村は現地の新聞の「神州日報」の綴じ込みを持って来て山川に読ませる。その記事は、戦争当時勇士であつたある床屋の主人が戦後身持ちを悪くし、とうとう酒樓で飲み仲間と喧嘩した揚句、戦争の時に負った首の傷口が破れて絶命したことを紹介するものであつた。山川がその記事を読み終わった後に「面白いだらう。こんな事は支那でなくつては、ありはしない。」と述べる木村は、首が落ちるという摩訶不思議なことが起こりうる国として中国を捉え、そのような奇怪な出来事は日本では起こり得ないと考えているはずだ。ここには、合理・科学・文明の国として日本を捉え、その対立項として中国を不可解・幻想・怪奇の国だと認識する枠組みがあるのであり、中国と日本を差異化する欲望が仄見える。首に重傷を負つてこれまでの生活を反省する何小二について語る際にも、木村は「支那めいた句を送つて来る」「テエブルの上の紅梅へ眼をやつて」から話すのであり、中国の文化を味わう、「支那趣味」に近い態度を見せている。もちろん、中国に神秘性を付与したり、中国の文化を享受したりすること自体は、貶視というよりむしろ中国に対する日本のオリエンタリズムとする方が適切だろう。しかし、サイドが「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式^{スタイル}なのである」⁽¹¹⁾と述べるように、オリエンタリズムは優越的位置にいるものが従属的種族に声を与えて支配するための思考様式なのであり、その国に対する貶視の視線と表裏一体の関係にある。木村は、あくまで優越的位置

から後進の中国を捉えるパラダイムを持ったまま何小二の物語を語るのである。

そして、「神州日報」の記事の男が自分の知っている何小二という中国人であることを山川に明かした木村は、戦争当時野戦病院で親しくなった何小二の追憶を山川に語って聞かせる。木村によれば、何小二は戦時日本兵の手によって首に重傷を負った際、今までの自分の生活が浅ましくなってきた。だが、戦後すぐに無頼漢となり、その結果飲み仲間との喧嘩で首が落ちた。木村の推察によれば、何小二はその時もまた今までの自分の生活を浅ましいと感じたはずだという。それに対して山川は、次のように述べる。

「君は立派な空想家だ。だが、それならどうしてあいつは、一度さう云ふ目に遇ひながら、無頼漢なんぞになったのだらう。」

「さう云ふ目」という言葉には、〈ひどい目〉というニュアンスがあることから、今までの自分の生活を浅ましく感じるといふ反省の体験ではなく（木村の語る何小二の物語を聞く限りでは、何小二の反省体験そのものは過酷な体験に聞こえないはずだ）、日本兵によって〈首を切られた〉体験を指すのだと考えられる。また、「ながら」という言葉は「両立しにくい二つの事態が同時に成り立つ意を表す」言葉である。⁽¹²⁾ この逆接の接続語の後の内容が〈無頼漢になった〉というものであることから、その前に述べられる内容は、〈無頼漢であったためにそういう目に遇った〉というものになるはずだ。この際、〈無頼漢であった〉という意味内容と〈そ

ういう目に遇った〉という意味内容は当然直接的な因果関係によって結ばれるはずである。要するに、山川の言葉は〈無頼漢であったために首を切られたのに、どうしてまた無頼漢になったのか〉という内容なのだ。それでは、山川が考える戦時の何小二の〈無頼〉とはどのような状態なのか。首を切られる原因を無頼であるという状態に求めていることから、〈無頼〉とは戦争以前の何小二の素行の悪さではなく、戦争行為そのものを指すのだと言える。したがって、山川は何小二が戦争を行うことを無法なものとして蔑視していると言えるだろう。その山川の言葉を否定しない木村も、山川の提示する構図を共有しているのであり、何小二が戦争行為に関わることを無頼として蔑んでいるはずである。しかも、木村は、戦後も「陸軍少佐」であり、戦争を肯定する組織に所属していることから、日本の戦争行為は問題視せず、中国の戦争行為を無法と見做しているのである。木村には中国に対する貶視のまなざしがあると言えるだろう。

この木村の持つ思想的枠組みは、小説の終わりで木村の発する言葉とも呼応関係を持つ。

「我々は我々自身のあてにならない事を、痛切に知って置く必要がある。実際それを知つてゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我々の人格も何時どんな時首が落ちるかわからない。——すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に読まなくてはいけないのだ。」

「すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に読まなくてはいけないのだ」と語る木村の言葉から、中国の新聞の読み方と日本の新聞の読み方を画然と区別する枠組みが見てとれるのだが、ここで別して着目したいのはほかでもない。人格の落ちる物語が瀾漫する国として中国を見做し、それを「我々」日本人は反面教師として学び、人格を保つ努力をしなければならぬと言いたげなその口吻である。ここでは、理性の有無によって、日本と中国の差異化を図っており、「日本＝文明／中国＝野蛮」という対立図式が見てとれるのだ。

このような木村の中国貶視のパラダイムは、泉鏡花の「海城発電」の日本赤十字社の看護員の「困りましたな、何うも支那人の野蛮なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものゝ組織を解さないで、自分等を何がなし、戦闘員と同一に心得てるです。仕方がありませんな。」という中国貶視のまなざしに通底する。⁽¹³⁾ここでは、赤十字組織を解さないという点で清兵を「野蛮」と見做しているのであるが、日本を文明国と考え、その対立項として中国を野蛮な国と認識する枠組みは、日清戦争の頃から日本に瀾漫し始めたパラダイムであった。

檜山幸夫によれば、日清戦争で清国領内に入った日本軍兵士は、「衰退した大清帝国という実像」を目撃し、「建物の空虚さと不潔感に大きな衝撃を受け」、「兵士が誇りと思う国家が無かったこと」や「依然として非近代国家であったこと」、「封建的軍隊過ぎたこと」に理解しがたいものを感じたという。それに加え、「緒戦の大勝利に酔った」ことで、「清国を侮る意識」が生まれ、「弱兵清軍論」が共有されるようになった⁽¹⁴⁾という。日本兵は、日清戦争で中国の領土に入ること、その現状を目

撃し、中国に対する賤視のまなざしを育んでいったのだ。

日清戦争の開戦により、知識人たちも中国に対する貶視の感情を共有するようになっていった。たとえば、福沢諭吉は一八八二年にみずから創刊した「時事新報」の一八九四年七月の論説「日清の戦争は文野の戦争なり」において、次のように述べている。

彼等（清国人を指す——引用者注）は頑迷不靈にして普通の道理を解せず、文明開化の進歩を見て之を悦ばざるのみか、反対に其進歩を妨げんとして無法にも我に反対の意を表したるが故に、止むを得ずして事の茲に及びたるのみ。（中略）幾千の清兵は何れも無辜の人民にして之を鑒にするは憐れむ可きが如くなれども、世界の文明進歩の為に其妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざるの数なれば、彼等も不幸にして清国の如き腐敗政府の下に生れたる其運命の拙なきを自から諦むるの外なかる可し。⁽¹⁵⁾

福沢諭吉は、日清戦争を「文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦」であると規定し、中国を野蛮視するパラダイムの形成に荷担していたのだ。内村鑑三も、日清戦争の目的に関して、「蒙昧頑愚の徒を排除せざるべからず」と言い、「北京政府」を「其文明の光輝を吾人の同胞に供せざる」ものと明言した。⁽¹⁶⁾また、正岡子規は一八九五年四月一〇日に大連港に向かう輸送船に乗り込み、前年のうちに終わった戦跡を訪ね、四月二六日、金州の料理店で食事をとる。「二十六日、支那料理店に入る。むさくるしき事いわん方なし。庖厨は食卓に近く、

天井は低くして煤けたり。品格は本国の居酒屋に似て、もの喰う人のさまも車夫、立ちん坊にまさりて卑し」(「日本タイムス」一八九五年五月一六日)。中国の料理店の不潔さ・建物の造りの拙劣さ・食事をとる人の様子の卑しさを表現している。

「首が落ちた話」が発表された当時にも、芥川龍之介が書簡の中で、「兄さんがこの間満州から匪賊の首を斬る所の画はがきをくれましたが斬つてしまつた所です。満州は野蛮ですね。あんな野蛮な所を旅行してかへつて来て文ちゃんに叱られては可哀さうです」(塚本文宛、一九一七年一〇月三〇日)としている。小説発表当時の日本においても、中国に対する賤視は脈打つ。

日清戦争の頃から日本では中国を「野蛮」と名指すことで日本を「文明」国と逆規定する構造が蔓延してくるのだが、その中で、中国の軍隊の「無頼」さを指摘する言説もあった。福沢諭吉は、「時事新報」に掲載された「支那の大なるは恐るゝに足らず」(一八九四年九月二三日)において、中国兵に関し「過般太沽の船中にて我領事館員等の一行に向て公然暴行を働き、剩さへ将官の目前に於て罪もなく力もなき婦女子を捕縛して残刻に之を苦しめたる」とし、中国兵の「不規律」ゆえの無頼な振舞いを論難している。また、旅順での日本軍の住民虐殺に関する外国人からの批判に対する釈明の論説の中で、彼は日本の軍隊の文明性と清の軍隊の無法を指摘している。

日本の軍隊は真実紛れもなき文明の軍隊にして、其敵に対するに寛大にして慈悲心に富めるは今更蝶々するを要せず。例へば牙山の如

き、平壤の如き、只敵を打払ひたるのみにして之を鑒にせざるのみか、軍門に降伏したるもの若しくは捕に就きたるものゝ如きは、国内安全の地に護送して衣食の自由を得せしめ、又負傷者は病院に入れて治療を加へしむる等、其取扱は毫も自国の兵士を遇するに異ならず。其待遇の厚きは敵人さへも感激する所にして、何人も我日本国の寛仁大度を疑ふものはある可らず。(中略)今度旅順の砲台は支那兵が死力を竭して守りたる所にして、実に一万五、六千の兵力あり。我兵の奮戦これを陥るや、彼等の多数は遁れて四方に散じ、其逃げ後れたる者共は市街の民家に濫入して衣服を盗み取り、兵士の服装を脱して之を着替へ、恰も普通の市民の如くに装ひながら、其兵器をば捨てずして処ゝに潜伏し、我兵の進んで市街に入るや、隠れながら発砲して抵抗を試み、甚だ危険なるより止むを得ず家屋内を搜索して変装の兵士を見出し殺戮に及びたることなり。元来支那人が信義を口にして実際に不信不義を恥とせざるは実に言語の外にして、抑も普通の人間を以て見る可き人民に非ず。(「旅順の殺戮無稽の流言」、「時事新報」一八九四年二月一四日)

福沢諭吉は、日本の軍隊は寛大で慈悲心に富む文明の軍隊であり、清の軍隊は、国際法を遵守しない狡猾で危険で無法な軍隊であると主張しているのだ。

以上の日清戦争当時の風潮を横に並べれば、木村の中国に対する認識には、日清戦争頃から一般化していた中国に対する貶視のコードが少なからず影響を及ぼしているのではないか。

同時に、何小二が日本兵に首を切られ、日本軍が彼を野戦病院へ送り届けたことに關して、「正氣を失つてゐる所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやつた」と言う木村の言葉には、日本軍の寛大さを誇る意識、つまり、文明の軍隊としての日本軍に対する矜持があらわれていると言えそうである。

それに対して、語り手の語りには、中国を日本と同等のものとして扱うパラダイムがあるのであり、当時の中国貶視のパラダイムに対して批評性を持つとも言えるだろう。

そもそも木村は捕虜としての何小二と接していたのであり、軍人が捕虜を見る視線、つまり上位のものが下位のものを見るまなざしを持った状態で何小二と接していたのであって、何小二に対する賤視を持たないわけにはいかなかったはずだ。木村は野戦病院に収容されていた当時の何小二を「極正直な、人の好い人間」で「柔順なやつ」として性格の形容を行っている。正直・温厚・柔順という性格は捕虜としての性格であろう。軍人が捕虜を見るまなざしで何小二を性格規定しているのである。木村は何小二と接した時から彼を捕虜として見做していたのである⁽¹⁷⁾。戦勝国の者が敗戦国の者を見るまなざしで何小二を見ていたのである。このため、木村は何小二を賤視するパラダイムからは自由になれなかったのだ。

それとはうらはらに、語り手は何小二の性格の形容を一切行っていない。木村・山川・神州日報記事がいずれも彼の性格形容を行っているのとは対照的である（山川・神州日報に關しては後述）。語り手には、木村のように軍人という立場がないのであり、何小二の性格を規定する言葉を

思いつけないのだ。語り手の語りは「立場をもたない語り」なのである。語り手の「立場をもたない語り」と木村の「中国賤視の語り」が軋み合う対立の図式は鮮やかだ。

何小二が後悔した人生を「無頼漢」としての人生と定位する木村の即断に紛れはない。「上」「中」で語り手が語る何小二の物語を単純化して言う、と個々の分節化した状態に醜さを感じ、世界との融和を志向する、となることは既に述べた。何小二が醜惡だと感じたのは、己の生存のために他を踏み台にするという人間のエゴイズムのことであろうが、如上人間の独自の存在性の内実が具体的に何であるか、語り手は最後まで明かすことはない。読者の想像に委ねるように、明確に特定することが困難となるように書かれている。軍隊の中で青雲の志を抱く功名心の醜惡かもしれないし、戦争に従事して敵対を志向する闘争心の醜惡かもしれない。もしかすると、無頼の生活かもしれない。読者は可能性のある無数の物語の中から一つを選び取り、何小二の人生に想像の翼を広げなければならぬ。いくつも選択肢があるにもかかわらず、木村は何小二から直接話を聞いて、彼の後悔した人生を無頼漢としての人生であると即断してしまっているのである。この即断の深層に、木村少佐の中国貶視のパラダイムがあることは紛れがない。やはり、木村は語り手が語る何小二に關する記述とは相容れない叙述を行っているのである。

さて、これまでの考察によって、語り手の語りと木村の語りが対立しているのを見てきた。先行研究では、語り手の語る何小二の物語と木村の語る何小二の物語を連続させて捉え、二つの語りが地続きとなっていることを無前提に受け入れたうえで、木村の末尾の発言をそのまま物

語の主題と見做すものが多かったのだが、「下」の部分においては生身の何小二の解釈ではなく、新聞記事という一つの「解釈」を解釈する形で成されていた」とする水洞幸夫論⁽¹⁹⁾や、「木村少佐が戦争に勝った日本人／負けた中国人という立場の違いを当然の前提として何小二を捉えている」ため「何小二の気持ち木村少佐に理解できない」とする林剣君論⁽²⁰⁾のように、木村の言葉が何小二の人生の再現たりえているかを疑う考察もある。本稿は、これらの論究に論証を与えながら、木村の言説が日清戦争当時のイデオロギーの影響を受けていることを指摘、さらに、語り手の語りの特質の分析も行つて、木村の語りとの対立の様相を具体的に特定したものである。

三

以上の考察で、語り手の「立場をもたない語り」と木村少佐の「中国賤視の語り」の二つの語りが軋み合う対立のありようを見てきた。従来この小説のテーマを担うとされてきた木村の言葉は、実はその深層に中国賤視のパラダイムを潜ませていたのであり、この語りは語り手の「立場をもたない語り」によって相対化されているとも言えるだろう。

語り手は、その語りの性質によって木村の語りを相対化する役割を果たしているわけであるが、木村の内面思惟を描かないことによって木村との距離を開示させている。語り手は、山川については、「それがあまり唐突だったので、技師はちよいと驚いたが、相手の少佐が軍人に似合はない、洒落な人間だと云ふ事は、日頃からよく心得てゐる。そこで咄嗟に、戦争に関係した奇抜な逸話を予想しながら」というように、か

なり長い記述によってその内面思惟を描き出している。それに対して、木村の内面については一切描写していない。木村の内面の空白は、語り手の木村からの背離を物語り、語り手と木村との較差を支える。木村の内面に寄り添わないことで、語り手は彼の言葉を相対化しうる位置を獲得しているのだ。

ところで、木村が「人格」を保つことに拘るのには、いかなる理由があるのだろうか。木村の人格重視の姿勢には、軍人特有の人格主義が影響を与えているようにおもわれる。一八九七年に小作農民の子として生まれた横須賀勘衛門は、一九一八年に徴兵検査を受け、第一補充兵になったころの回想を次のように語っている。

やっぱり兵隊というのは、人間の修養に必要なものだあと思つて。軍人上りというのはひとつのハクになっていましたからね。嫁さん貰うときにも、あれは兵隊上りだということ。叩き直されてくる。叩き直されますからねえ、昔は。話し聞くと、まあ打ちのめされてますからねえ。やっただすから、言うこと聞かなかつたら、あらゆるリンチが行なわれたですからねえ、昔の軍隊は。いまの自衛隊なんぞと違いますから、非常に。叩き直されてくるからまともな人間になってくるわけです。根性とか意地が突っ張ってくるし、責任感とか人との約束を違えないとか、軍隊は一つの間修養段階でした⁽²¹⁾ね。

軍隊生活を、根性・意地・責任感を磨く人間修養の場として捉える横須

賀の発言は、芥川龍之介の「將軍」（「改造」一九二二年一月）の中村小將がN將軍（乃木希典がモデル）のことを「徹頭徹尾至誠の人」で「人格者」と見做す考え方とアナロジーをもつ。軍人は人格を鍛えなければならぬと考えられていたのだ。木村が人格の維持を図ろうとする考えには、軍人特有の人格主義的パラダイムが影響していると言えるだろう。木村は、中国を抑圧するパラダイムと軍人特有の人格主義的パラダイムの二つの枠組みの中で何小二の批評を行っているのである。

このような木村の語りが語り手の語りによって相対化されていることは先に述べたが、木村の語りはさらに別の二種類の語りによっても相対化されている。その語りは、「神州日報」の記事の語りと山川理学士の語りである。

まず、「神州日報」の記事については、国家主義のパラダイムで語られたものである。そもそも「神州」という言葉は、「神国」という意味を持ち日本や中国で自国の尊称として使われた言葉であるが、自国を神国として尊ぶこの言葉は、戦時に国威発揚のために使われがちな言葉であろう。鏡花の「海城発電」でも、日清戦争の最中、愛国主義者・海野は博愛主義者・神埼に「愛国の何たるかを教え」るために、「苟も神州男児だ」と一喝する。戦時ナショナリズム発揚のために「神州」という言葉が利用されたことを私たちに教えてくれる。「神州日報」は国家主義の立場をとっており、国家に忠実な人民を称美する機能を持っていたのである。

記事の冒頭で、何小二を「日清戦争に出征して、屢々勲功を顕したる勇士」として性格規定する叙述は、国家に忠実な英雄を創出しようとする

るメディア特有の語りだろう。芥川が中国の新聞を読んでいたとは思えないので、日本のものに限って新聞記事を読み込むと、日清戦争当時の新聞は、国家に忠実な英雄を創り出す物語が多く見られる。たとえば、一八九四年九月二十九日の「読売新聞」の以下の記事。

○我海軍兵士の勇敢

勇将の下に弱卒なし海洋島沖海戦の詳報到達せば我海兵奮戦の美談も渺からざることならんが今聞くが儘に其一二を記さんに、比叡艦乗組の一水兵激戦の際操砲の任に当り榴弾を抱いて将に之を込めんとするや流弾飛び来て其前に爆裂し為に重傷を負ふ然れども彼は毅然として動かず弾丸を握りし儘突立ち居ること石像の如し他の水兵其の重傷を負へるを知り代て操砲の任に当り握れる弾丸を受取るや彼は安心して瞑目せり、又一水兵あり甲板に在て敵弾に中るも容易に瞑せず頻に敵兵を叱咤して止まず斯くて我艦大勝利の凱歌を奏して大同江に凱旋するや水兵は始めて我軍の勝利なるを知り微笑して瞑したりといふ

佐谷眞木人は、日清戦争に関する報道に関して、「戦死者が最期まで勇敢に戦った」という「忠勇美談」を「新聞や雑誌はこぞって」「掲載した」としているが、軍人の出陣を物語化し、英雄を創り出すのはメディア特有の語りである。何小二を「勇士」と見做すのも、戦後の何小二の身持ちの悪さを「素行修まらず」とするのも、国家主義的なメディアに特徴的な語りなのである。この「中国の国家主義的語り」により、戦中

の何小二を無頼漢と見做す木村の語りは相対化されているのである。

次に、山川技師の語りについてであるが、人間の言葉を信頼しない、技術者特有の語りである。「アツタツシエの癖に、新聞記者と一しよになつて、いゝ加減な嘘を捏造するのではあるまいね」とする山川の発言から、彼が新聞記者の虚妄に不信を抱いていることが分かる。何小二が戦中日本兵に首を切られた際、今までの自分の生活を反省したのに、戦争が終わるとすぐに無頼漢になったことに関して「猫をかぶつてゐた」と見做すのも、人間は嘘をつくものであるという山川の認識が露呈したものだ。山川は、人間をいつわりの生き物だと思っており、人間の言葉や態度にまやかしを感じているのだ。

山川が人間の言葉や態度を信用しないのには、山川が「農商務省技師」であることに関係ありそうだ。農商務省は一八八一年に設置された、農政と産業の育成、振興を担当した行政機関であるが、一八九六年に中国に視察に来るのはどのような目的からなのか。一八九九年四月に書かれた農商務省の『清国蠶絲業復命書』（高山社同窓会、一九〇六年三月）のしがきには、「清国蠶糸業視察ノ為メ出張ノ命を受ケ昨年十月十二日東京出發同十九日上海二到着シ浙江江蘇省兩省ノ地ヲ視察調査スルコト約七十日ニシテ終リ」とあり、一九〇一年三月に書かれた『清国蠶糸業二関スル報告書』（農商務省商工局、一九〇一年九月）のしがきにも、「昨年七月海外実業練習生ノ命ヲ拝セシ以來清国蠶糸業ノ根軸タル江蘇浙江ノ兩省内各生産地ヲ巡遊シ専ラ繭糸商工業ノ練習ニ意ヲ注キ或ハ上海二於ケル洋式製糸場及彼我ノ商館二出入リ窃ニ其工事若クハ取引ノ如何ヲ調査シ或ハ内地ノ生産者ニ就キ之レヲ討究シタル実績ニ聊力僻見ヲ附加シ

茲に具陳致候」とある。山川が視察に来ている時期とは三年以上の時間差があるので、これらの資料の引用には慎重でなければならないが、山川が中国の蠶糸業視察のために中国を訪れている可能性は十分にある。

そして、『清国蠶絲業復命書』には、上海の一年間の気温の統計データ・清国の輸出額のデータ・清国の生糸の輸出額データなどが報告され、『清国蠶糸業二関スル報告書』には、中国における気候風土・桑園・蚕種・養蚕・蚕繭・製糸業・繭糸屑物について報告されている。このことから、山川が自然現象の調査を行い、データの作成に従事しているだろうことが推察される。山川は、自然や工場の観察をしデータを作成する仕事をしていることが分かる。山川は人間の言葉や態度に頼らない仕事をしているのだ。

山川の発言内容が「人間不信の語り」になることには、山川の仕事内容が影響を及ぼしていると言えそうである。木村は、何小二の話や新聞記事をそのまま信じて、何小二に関する物語を自分の中でつくっていたのであるが、この山川の語りによって、人間の言うことに立脚して自分の解釈を行う木村の語りは絶対性を失っていくのである。

ところで、「首が落ちた話」を読んてちょっと気になることは、山川が一本しか葉巻を吸っていないのに対して、木村は二本吸っているという点だ。二人は談話をしながらいずれも葉巻を吹かしている。山川が葉巻を吸う様子を描写しているのは二箇所である。「山川技師もにや／＼しながら、長くなった葉巻の灰を灰皿の中へはたき落した」という部分と、「山川技師は椅子の背へ頭をつけながら、足をのばして、皮肉に葉巻の煙を天井へ吐いた」という部分である。山川は、一度灰をはた

き落してから再度吸っていることが分かり、おそらくは全部で一本しか吸っていない。それに対し、木村が葉巻を吹かす様子を描写しているのは三箇所ある。「木村少佐は、ゆつくり葉巻の煙を吐きながら」という箇所、「木村少佐は葉巻を捨て、珈琲茶碗を唇へあてながら」という箇所、「木村少佐は新しい葉巻きに火をつけてから」という箇所である。木村は合計二本の葉巻を吸っていることが分かるだろう。木村の方が山川より一本多く吸っているのだ。このことにより、木村が嗜好品に対する習慣的欲望を抑えられない性格を持っていることが暗示されていると考えることは、無理な解釈とも言い難い。なぜなら、木村がコーヒーを飲む様子は描写されているのに（「珈琲茶碗を唇へあてながら」）、山川が飲む様子は描かれていないからである。ここでも、木村がコーヒーという嗜好品に愛着を示す様子が見て取れる。木村は、習慣的な欲望を抑えられない性格なのであり、このことによって木村が欲望を伴う習慣的思考を抑えられない性格であり、対して山川がより思索型で理性的であることを暗示しているとも言えるかもしれない。葉巻やコーヒーに関する描写は、木村と山川との較差を隠微に示す譬喩的な表現の意味合いを持つ。彼らの思考は、彼らの言葉だけでなく、彼らの身振りというもう一つの言語を手がかりに解き明かすことができる。このもう一つの言語によって、木村の語りが相対化されるありようを読み取らねばならない⁽²³⁾。

「首が落ちた話」では、従来物語世界で権威をもつとされた木村の語りが、実は、語り手・新聞記事・山川の語りによって、相対化されていたのであり、語りの重層性によって、日清戦争当時のイデオロギーに対する批評性を持った小説なのである。

注

- (1) 関口安義「首が落ちた話」論——人生のしたたかな眼」（芥川龍之介研究年誌）二〇〇七年三月に次の指摘がある。
「二九八（大正七）年に発表された日清戦争の戦場を舞台とした小説で、清国側に視点を置いて書かれた日本の小説は稀である。執筆当時、彼（芥川——引用者注）は横須賀の海軍機関学校という兵士養成機関の教員であった。こうした小説にあっては、日本びいきが出てもおかしくないとこだ。が、そのような面はまったくない。」
- (2) 八面楼主人「泉鏡花の『海城発電』」（『国民之友』一八九六年一月）。
- (3) ただし、この小説は全体として、日本人の愛国主義的視座が相対化されており、本稿ではその点を小説のモチーフとして重視している。しかし、表層的には日本的視座が相対化されているようには見えていないのである。日本を敵対化していないかのような語りが採用されているのである。
- (4) 水本浩典、細淵清貴「日清戦争従軍兵士が記録した異文化体験——日記の類似表現に着目して——」（『人間文化』神戸学院大学人文学会、二〇〇八年九月）。
- (5) 成沢光「現代日本の社会秩序——歴史的起源を求めて」岩波書店、一九九七年一月。
- (6) 吉田裕『日本の軍隊』岩波書店、二〇〇二年一二月。
- (7) 渡辺正彦は、「回心の結果何小二は調和的、融和的な心境になり、誰に対しても謝り、許そうとする」と述べている（『芥川龍之介「首が落ちた話」材源考——ドストエフスキー「白痴」との関連——』（『近代文学論』近代文学論同人会、一九八六年三月）。また、吉田俊彦は、「徐々として彼の胸の上へ下つて来る」「限りなく深く」「蒼い空」は「人間の独自の存在性への確信とか自負を空無化し、彼我合一の道を開く絶対境を暗示するものに外ならない」としている（『首が落ちた話』（芥川龍之介）小考——認識面における漱石の影響——」（『岡大國文論稿』一九八九年三月）。
- (8) 関口安義、前掲「首が落ちた話」論——人生のしたたかな眼」。
- (9) 林剣君「芥川龍之介「首が落ちた話」論」（『百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』二〇〇八年三月）。
- (10) 引用は、松浦一『文学の本質』（白凰社、一九七三年一二月）に拠る。

- (11) エドワード・W・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、一九九三年六月。
- (12) 『明鏡国語辞典』大修館書店、二〇〇二年。
- (13) 「私の文壇に出るまで」(『文章倶楽部』一九一七年八月)において、芥川は「中学時代には漢詩を可成り読み、小説では泉鏡花のものに没頭して、その悉くを読んだ」としている。
- (14) 檜山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争―戦争の社会史―』雄山閣出版、二〇〇一年四月。
- (15) 福沢諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」(『時事新報』一八九四年七月二十九日)。引用は、『福澤諭吉全集 第一四卷』(岩波書店、一九六一年二月)に拠る。以下、福沢諭吉の文章の引用は、すべてこの全集に拠る。
- (16) 内村鑑三「日清戦争の目的如何」(『国民之友』一八九四年一〇月三日)。引用は、『内村鑑三全集 3』(岩波書店、一九八二年二月)に拠る。
- (17) 林剣君は前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」論」において、「木村少佐は戦争に勝った立場に立って、負けた中国人の一人として何小二を見ているのである。」と指摘している。
- (18) その代表に、渡辺正彦前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」材源考―ドストエフスキー『白痴』との関連―」、関口安義前掲「首が落ちた話」論―人生のしたたかな眼」、熊谷信子「芥川龍之介の描いた日清・日露戦争―「首が落ちた話」―」(『遊卵船』遊卵船同人会、二〇〇四年六月)がある。
- (19) 水洞幸夫「首が落ちた話」・「西郷隆盛」の位置―解釈する人々―」(『学葉』金沢女子短期大学、一九九〇年)。
- (20) 林剣君、前掲「芥川龍之介「首が落ちた話」論」。
- (21) 東敏雄編『大正から昭和初年の農民像』御茶の水書房、一九八九年九月。
- (22) 佐谷眞木人『日清戦争―「国民」の誕生』講談社、二〇〇九年三月。
- (23) 「点鬼簿」(『改造』一九二六年一〇月)に、「僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女の人が一人、どこから僕の一生を見守つてゐるやうに感してゐる。これは珈琲や煙草に疲れた僕の神経の仕業であらうか? それとも又何かの機会に実在の世界へも面かけを見せる超自然の力の仕業であらうか?」とある。

附記

芥川の文章の引用は、『芥川龍之介全集』(岩波書店、一九九五年二月)に拠る。